

桜島安永大噴火による集落の変転

橋 村 健 一

2011年3月11日、東日本大震災は人々の生活の場である風土を一挙に破壊し、人々の生命、財産を奪った。日本国内はもとより、世界的な関心と危惧の念は高まり、その影響は大きい。そこで私たちの身近な生活圏を見渡してみよう。長期間にわたって噴火活動が続けている桜島は世界でもまれな火山である。

桜島は、四大噴火と呼ばれる文明・安永・大正・昭和大噴火災害の歴史を繰り返してきた。なかでも、安永大噴火は1779（安永8）年10月1日に起こったもので、地震・噴火・新島の出現・津波発生など複合的な巨大噴火となった。

本稿は、安永大噴火で風土の変転に^{ほんろう}翻弄され続けた桜島北東部にあった^{こうめん}向面村（現、高免町）集落の被災、避難、帰還・復興と、海上に誕生した新島の集落について述べてみたい。

1 『桜島燃記』⁽¹⁾に見る噴火のはじまり

この噴火記録は、1839（天保9）年、垂水の伊地知^{すえかた}季虔が著したもので、安永大噴火後60年経ったときの文である。

(1) 噴火の前兆

「1779年9月29日、地震が始まったかと思うと止み、止んだかと思うとまた始まった。長く地震が続いたかと思うと短いこともあった。また、強い地震なのか弱い地震か、はかり知れず、地震のたびに家は崩れ土地も裂けるのではないか、驚き危ぶみ、^{きも つぶ}肝は潰れて小さくなる思いだった。髪の毛は立ち、頭がふくらんだような心地となった」と述べている。

(1) 『垂水村郷土誌』1915（大正4）年、垂水村教育会

(2) 噴火初日

「大噴火がはいよいよ始まった。山頂から火がほとばしり、あたかも東^{たば}ねた綿のかたまりが次々と上空に押し出され、噴煙の中の炎、稲光、雷鳴などが続き、噴煙の高さは3里以上に達した」という。

2 新島の出現

高免村、松本氏所蔵の『桜島噴火記録』⁽²⁾に次のような記述がある。

「高免村之燃ハ十月朔日（1日）ヨリ同三日高免村之人居不殘燃ニ成リ瀬崎同様ニ燃ニ成、同四日瀬崎ヨリ三丁斗海中大燃致、同十月五日両所ヘ石間々相見得、同十四日島二ツ出、漸々大ク相成、右二島之内桜島方之島涌出候処ニ丑正月（1781年）正月比ヨリ引入候」

高免村は10月1日から3日にかけて集落は残らず焼失、瀬崎も同様になってしまった。同4日には瀬崎から3丁ばかりの海中で噴火が起こり、翌5日には2か所で石が見え、同14日には島が2つ出現。島は次第に大きくなり、2島のうち桜島側に近い島は、1781（安永10）年の正月ごろから海中に没した」と述べている。1843（天保14）年の『三国名勝図会』⁽³⁾には、10月14日1島涌出し、翌年の7月に海中に没したと記している。（10月14日の日付は、松本氏記録と一致）

3 ツナミの発生

『三国名勝図会』は、新島出現と連動して起ったときの状況を、次のように説明している。

「海底鑄冶の如きの音あり、海潮沸騰して、砂を飛せ、泥を雨らし、或は泥を発し、石を発し、或は三日を経、或は五日を過ぎ、出沒常なし、巨岩崩れて細石と変じ、泥沙集りて洲崎に化し、其状定ることなし、其一島涌出する時は、必泥沙淤まき上り、波涛怒号し峨々として山の如く、其高さ三四丈（9～12m）に至り、倒れて人家に逼る、島民畏れ避く、是を海嘯といふ」

ツナミ（津波）が襲いかかってくる様子は実に凄惨そのものであった。

1976年、鹿児島県が刊行した『旧記雑録追録六』⁽⁴⁾に、1780（安永9）

(2) 『安永桜島噴火史料』鹿児島県立図書館所蔵

(3) 『三国名勝図会』1982（昭和57）年、新潮社

(4) 『鹿児島県史料』1976（昭和51）年、鹿児島県

年8月11日夜、「燃炎アガリ、初燃出ル無替、大煙ヒカリモノ且音初燃出ルニオナジ、浪アガリ候事三丈計ばかり（約9m）、小池浜辺二丈計こいけ（約6m）」という記載がある。同10月4日には「大音相聞得、大浪アガル」、同10年3月18日、高免村の前に出現した「島燃上り、泥吹上候事オビタダシク、津波アガリ候事オビタダシク」とあり、白浜村の6人が波にさらわれ相果てたという。

4 薩摩藩の被害報告

安永大噴火の当時、薩摩藩は噴火約1か月後に、幕府へ最初の報告をした。その報告によれば、初期調査に大変な困難があったと述べている。領内の田畑の被害をはじめ、死者153人、死馬285頭などだった。

被害報告は、さらに次のように伝えている。

海中で燃出した新島は、次第に大きくなってきた。海底からの火勢が強く燃出たとき、大波で近郡の田地、人家などが打ち潰され、城下まで高汐たかしおがあがった。海辺の士族屋敷や町家の破損が多かった。今後の被害はどうか計難いことであると深刻な苦悩を述べている。

1781（安永10）年3月18日には、新島の近辺で「俄ニ燃出にわか」で大噴火当初のような、おびただしい噴火が起こった。死者8人、行方不明者7人などの追加報告をしている。4月8日（4月2日、天明に改元）にも同じ所で噴火があり、先々どのようなことになるのか計難いことだと、前回の報告同様、ますます深刻な状況となったことを訴えている。

5 向面村の避難

桜島の北東部にあった向面村は、安永溶岩で埋没。すでに島外へ避難したが、その避難先は、松山（現、曾於市）の中原・津曲氏の記録⁽⁵⁾に、「半分は国分、半分は鹿児島へ相逃」とあり、横山源太夫所蔵の『燃之記』⁽⁶⁾には、「福山、国分、加治木へ相逃候処、高免村燃は燃出処にて、やはり燃立居、三日燃下り高免村中燃むらじゅうに相成候得共、朔日（10月1日）早く相逃候故怪我人無之候事」と述べている。

このように桜島の対岸、始良方面の地名が記されている。

(5) 『安永桜島噴火史料』鹿児島県立図書館所蔵

(6) 『安永桜島噴火史料』鹿児島県立図書館所蔵

6 旧「向面村」はいずこに

安永大噴火前の向面村の位置は、どこにあったのだろうか。

このことについて、小藤文次郎氏は、1916（大正6）年、その著書『桜島大噴火誌』⁽⁷⁾の中で、「溶岩下に埋没した向面（むこうめん）集落は、現在の浦ノ前^{うらのまえ}と高免の両集落間の海岸低地^{そのやまこうかく}にあった」と述べている。

また、下村彦一氏は、「旧向面集落が、園山岬角の南北いずれの側にあったかは容易に推知し難く、あるいはその東側にあったのではないか」⁽⁸⁾と述べ、依然として位置の推定は難しい課題として残している。

前述の「2 新島の出現」の項で、松本氏所蔵の記録に、「瀬崎」という地名があったので、その位置が載っている地図類を探している途中、「鹿児島海湾の海図」に載っていることが分かった。この海図は、1899（明治32）年に発行されたものだった。国土地理院が発行した5万分の1地図では、桜島北部海岸に突き出ている安永溶岩の北端部に「スズエ鼻」という地名が記されている。この突端部の内陸側に当たるところが、「瀬崎（崎）」と判明した。その後松本氏の記録は向面村～瀬崎～海中噴火～新島出現～新島の一島海中没という一連の噴火活動が起こったことを記していたので、この記事が、旧向面村の位置を想定できる資料になるのではないかと考えた。

しかし、次の2つの資料を調べたところ、旧向面村の位置を考え直す必要が生じた。

〈1〉安永大噴火前年1778（安永7）年の『三州御治世要覧』⁽⁹⁾と、〈2〉1810（文化7）年、伊能忠敬の『測量日記』⁽¹⁰⁾に記載されている距離（数値）を比較・集計してみた。その数値を分かりやすく次のように図表にまとめた。

(7) 『桜島大噴火誌』鹿児島県立図書館所蔵

(8) 『広島大学文学部研究紀要』第22巻2号、1963（昭和38）年、鹿児島大学図書館所蔵

(9) 『三州御治世要覧』鹿児島県史料集（25）、1984（昭和59）年、鹿児島県史料刊行会

(10) 『伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並びに解説』1970（昭和45）年、鹿児島県史料集（10）、鹿児島県立図書館所蔵

桜島安永大噴火による集落の変転

	資料名	白浜・向面(高免)間	向面(高免)・黒上(黒神)間	計
(1)1778年	『三州御治世要覧』	$53\text{丁} \times 60\text{間} \times 1.8\text{m} = \text{約}5.7\text{km}$	$44\text{丁} \times 60\text{間} \times 1.8\text{m} = \text{約}4.8\text{km}$	約10.5km
(2)1810年	『伊能忠敬測量日記』	$25\text{丁} \times 60\text{間} \times 1.8\text{m} = \text{約}2.7\text{km}$	$71\text{丁} \times 60\text{間} \times 1.8\text{m} = \text{約}7.7\text{km}$	約10.4km

1里 = 36町(町) 1町 = 60間 1間 = 1.8m

『三州御治世要覧』によると、白浜・高免間は1里^{ちょう}17丁、高免・黒神間は1里8丁とあり、安永大噴火前の高免村は白浜と黒神の中間より少し黒神側に位置している。同噴火後の伊能忠敬の測量日記を見ると、白浜・向面間は24丁53間、向面・黒上間は1里35丁9間となっており、向面村はだいたい白浜側に位置している数値である。

上の2つの資料の白浜・黒上(神)間の距離の合計がほぼ一致していることは、驚きだった。時代と測量方法、道路状況などで数値は異なるはずと思っていたが、合計の数値はほぼ一致していた。数値の単純計算の結果、旧向面村の位置を隣村からの距離でkmの単位で知ることができた。

ところが、この数値を検証するには、それぞれの当時の道路事情などを表す地図や資料と照合することが求められるが、関係資料の収集ができるかどうか。そこで、安永大噴火前後に幕府が実施した国絵図を調べてみた。

1702(元禄15)年の、薩摩国・大隅国・日向国の『国絵図』⁽¹¹⁾と1839(天保9)年の同『国絵図』⁽¹²⁾を見ると、桜島15か村の村名と全村を結ぶ道路が描かれている。前者が安永大噴火前、後者が同噴火後の国絵図である。村名・道路は、両者とも同じ描き方で変わっていないが、1か所だけ変わっているところがあった。それは、大噴火で出現した新島が、後者の国絵図に描いてあることだった。

後者の国絵図は、大噴火後のものなので、向面村の位置が、安永溶岩を避けて描いてあるのではと考えていたが、前者の大噴火前の国絵図と

(11) 薩摩国・大隅国・日向国『国絵図』解説書(元禄15年)鹿児島県教育委員会

(12) 薩摩国・大隅国・日向国『国絵図』解説書(天保9年)鹿児島県教育委員会

同じ位置に、村名が載っており、白浜や黒上（神）村を結ぶ道路も、前者と同じ路線だった。

旧向面村の集落は、他の各村同様に桜島の海岸に近い場所に、集村の形態を保っていたことを前提に、旧向面村の地点を村域としてではなく、旧向面村の集落位置がどこだったのかという視点から、関係資料を取り上げた。

伊能忠敬の測量日記には、その日の測量を「向面村^{あざ}新燃添より順測、白浜村字洞二而別手と合測」というように、村名と字名を記している。しかし、現在までこれらの字名が使われていないため、この字の位置が確認できず、村から村までの距離（数値）を参考にした。

結局、現時点では、旧向面村の集落（集村）は、『三州御治世要覧』の数値が示唆する地点、安永溶岩に取り囲まれた「園山^{そのやま}」近辺ではないかという思いである。

7 字絵図は語る

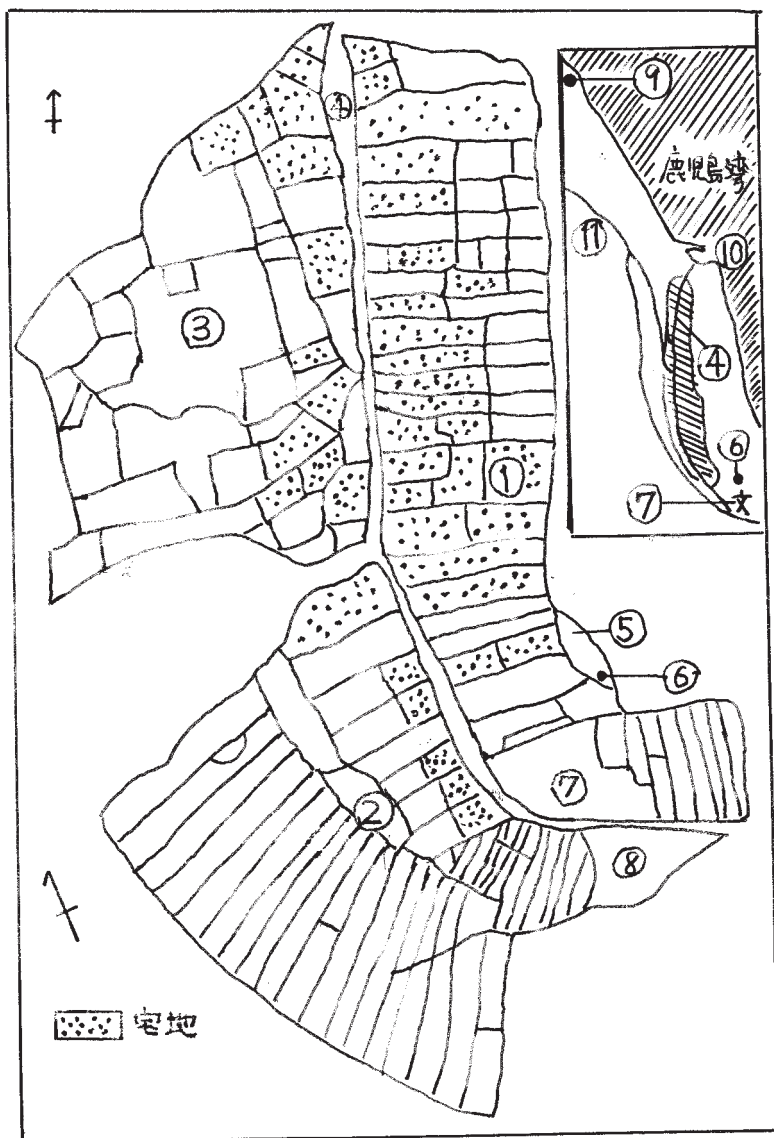
現高免集落の土地区画を、^{あざえず}字絵図で見よう。鹿児島地方法務局が保管している「閉鎖した^{ちせきず}地籍図」と表示してある地図（字絵図）が役に立った。

高免町の集落のある土地は、字「カロトの内1」、字「カロトの内2」、字「カロット甲」の3枚の「字絵図」の中にあった。

本県では、「地籍図」を「字絵図」と呼ぶことが多い。字ごとに描かれていることから、「字図」とも呼ばれる。

日本歴史上の画期的な変革といわれる「^{ちそ}地租改正」は、1873（明治6）年7月、地租改正条例公布後、全国的に実施されることとなった。本県では、十年戦没により、地租その他諸税の徴納上、幾多の特殊な問題があり、1879（明治12）年、改組に再着手するまで実施されなかった。その後の改正作業で、土地の^{じょうりょう}丈量（実測）が行われ、土地の形状や縦・横の^{けん}間数、面積を「^{のとりちょう}野取帳」に記入した。この作業を経て、字ごとに字絵図を完成させた。土地台帳の完備とともに、地図更正準則によって地図の修補も行われ、これらの作業が終わったのは、1888（明治21）年だった。字絵図は和紙に描かれ、当時の集落の土地情報を知ることができる。

高免町の集落部分の字絵図を見ると、方位、土地区画、地番、畑、道



高免集落の字絵図

- | | | |
|------------|-------|--------------------|
| ①字「カロトの内1」 | ⑤墓地 | ⑨「高岩」 |
| ②字「カロトの内2」 | ⑥ムクノキ | ⑩高免港 |
| ③字「カロット甲」 | ⑦高免小 | ⑪古河良（ふくら）への道（東白浜へ） |
| ④集落中央の道 | ⑧若宮神社 | |

路、墓地、学校用地、神社などが、この字絵図が閉鎖される直前までに記入されていたことが分かる。字絵図は字ごとに作成され、方位は同じでも、手書きによる見取図のような地図になっている場合が多く見られる。高免町は、①と②の字絵図が旧東桜島側（現東桜島支所管内）、③は旧西桜島側（現桜島支所管内）に属していたことから、②と③の間がうまくつながらない。同じ市町村内の字絵図であっても、隣接する字絵図を接着させようと思っても、不可能のことがよくある。

この字絵図を見ながら、現地調査を行い、まとめたことは、次のとおり。

(1) 集落は、狭い急斜面の谷に沿って、列状に宅地などが最上部の神社と学校まで続く。

(2) ①②の宅地は、ほぼ均等な土地割がされているが、③は均等な土地割とはいえない。

(3) 集落の地番は、旧東桜島側の①②が連続した地番、旧西桜島側の③が白浜から連続した地番となっている。（行政管轄のちがいから、地番のつけ方も異なる）

(4) 集落の中央を通る道路は、海岸と直結しており、漁港・避難港へは、傾斜地を下って行くのに便利である。この道路の下に排水路が埋設されているが、以前は道路が川の役目を果していたため、危険だった。桜島の河川は、降雨のときだけ流れ下る枯川である。

(5) 中央の道路に沿った宅地は、ほとんどが堅固な石積みの塀^{へい}で仕切られており、土石流を防ぐ役目を果している。

(6) 住民の連帯意識が高く、縁戚関係者が多い。^{えんせき}

(7) 集落の最上部には、平成5年に休校となった高免小学校が建っている。学校下の旧墓地の敷地内には、集落を見続けてきた「ムクノキ」の大木が残り、全身をクズで覆われ、クズの開花期は、赤紫の花を咲かせ見事である。

(8) 旧向面村は、安永大噴火後の避難生活を経て、故郷への復帰を果たそうとしたとき、故郷はすでに文明溶岩と、その後の安永溶岩に広く覆われており、新集落の適地が見当たらなかったのではなかろうか。安永溶岩の南端は文明溶岩地帯と接し、安永溶岩の北西端は、隣村の旧白浜村境に近いが、この村境近くに溶岩の流出から免れた旧向面村側の土

地が残っていた。それは、現地を歩くとよく分かる。現高免集落は入江に面しているが、入江側は急崖で、海岸に出ることは不可能に近い。現高免集落の中央を通る道路は小さな谷間を通り、復興期も海と陸を結ぶ重要な道路だった。この道路は、先人の飽くなき努力が実った遺産として残る。

そして、高免町の西隣り、現桜島白浜町の、小字「小浜」と同「高岩」を歩くと、ピワ畑の手入れをしている高免の人々と会うことができた。高免から白浜側へ農地拡大をして、現在はピワ園が続く。

8 新島を歩く

安永大噴火の特徴の一つは、小さな安永諸島とも言える島々を誕生させた。新島の中でももっとも大きな島は「燃島」と呼ばれている。

2011年の4月、私は新島に渡った。人口は4人、3家族が住む。高免町の浦之前港と新島を結ぶ鹿児島市の行政連絡船は、住民にとって行政上の諸連絡はもとより、生活連絡船としての役割を果たしている。

島の西岸の中央部から、なだらかな坂を登ったところに、旧新島分校跡がある。

同分校は、1900（明治33）年に設立されたが、新島の大字が赤水だったことから、西桜島村立桜洲おうしゅう小学校の分校となっていた。大正大噴火の翌1915（大正4）年、桜洲小学校が現在地（桜島小池町）に復興したため、分校の所属は同じ村内の桜峰おうほう小学校にかわった。分校の卒業生は黒神中学校に通った。分校は1972（昭和47）年度の児童数が零ゼロとなって、新島分校はその役割を終えた。分校跡地は、現在、京都大学の「観測井」（井戸の中に地震計を設置）の場所に生まれ変わった。

集落の民家跡は、アコウの大樹が群生し、その気根は、旧宅地のブロック塀を覆っている。分校跡の隣りには、神社があり、境内はシャリンバイ・トベラなどが密生し、ウグイスの美声があちこちで響きわたる。分校跡から東海岸へダンチクの生い茂る中をかき分けて、コンクリートの階段を下る。かつて、分校の子どもたちが海岸へ、かけ下っていたのではと思うことだった。

旧集落内には、唯一の残された井戸、水神祠、屋根つきの墓石、アコウの大樹の根元には、神の宿る敬虔な雰囲気けいけんをただよわせる祠など、一

集落の生活の跡をしのぶことができる。



〈新島分校跡〉

今も残る新島分校の校舎。
その前に京都大学の「観測
井」が設置されている。



〈見事な砂嘴^{きし}〉

美しい縞模様の織物のよ
うな砂浜。鳥の嘴（くちば
し）のようにも見える。



〈新島（燃島）の西海岸〉

断崖の下に、崩落した表
土。背景は桜島。尾根の左
端に昭和火口が見える。

島の周囲は、コンクリート製のテトラポットでとりかこまれ、海蝕の進行をくいとめているが、自然の風雨には堪え難く、崖の崩落は部分的に続いている。東西の崖の上部に近いところに、貝化石層が見られるが、この層も崖下に崩落し、一緒に崩落したシャリンバイの数株は、崖下で白い花を咲かせていた。

島の南端部の海岸まで歩くと、そこはすばらしい砂浜。鳥の嘴のよう^{くちばし}な「砂嘴」^{さし}。潮の干満で表面が見事な、しま模様となり、自然という匠^{たくみ}が作り出した造形には感嘆するのみ。

電気、水道、電話などライフラインも整い、船溜りには、漁船が2隻。錦江湾内の漁場へ出向く。新島はもともと漁業のさかんな島だった。新島は出現後、21年経った1800（寛政12）年に、赤水・黒神村から5戸移住した。現在まで、時代の流れの中で、人口は減少したが、噴火を続ける桜島を眼前にして、自然環境の変転を先祖代々、体験してきた。

また、錦江湾北部沿岸の人口稠密^{ちゅうみつ}地帯と一衣帯水の関係にある私たちの精神的風土の中心に、桜島とその周辺の島々は存在する。

※「向面」・「高免」・「黒上」の名称は各参考文献の表記に従った。

（元星峯中学校長・元下甕村教育長）